

《現地報告》

民族意識の高揚と伝統農法 ハワイにおけるタロ栽培による民族教育運動

山中 速人*

1. 研究の経緯と背景 ハワイ州の州都ホノルルが所在するオアフ島の最も西のはずれにワイアナエという町がある。

ホノルルから約50キロ、延々と続く砂糖きび畑の中を突き抜けるフリーウェイ H1 をアクセルを床にべたりと踏み込んで30分ほど疾走しマカハ岬につづく緩やかな丘を越え下り坂にさしかかると車の前方に真っ青な太平洋が見えてくる。この丘を越えたあたりから島の最北端まで広がる長い海岸線が俗にオアフ島のウエスト・コースト（西海岸）と呼ばれる地域である。ワイアナエはこの西海岸のどんづまりにある。

このワイアナエにハワイの伝統的な栽培法でタロ芋づくりを進めている農園があることを知ったのは、1988年の5月だった。マカハ農園、正式の名前をホア・アイナ・オ・マカハと呼ぶ農場がそれだ。マカハ農園では、タロ栽培をはじめ各種のハワイの伝統的な作物を栽培する一方、少数民族のハワイ人たちの子供や女性たちが民族意識を獲得し社会的に自立するためのいろいろな社会事業も積極的に進めているという。

以前より太平洋地域の少数民族運動に関心を持ち続けてきた私は、この農場の進める試みがハワイのマイノリティ問題を考える上で重要な意味をもつに違いないと考えた。88年4月から10か月間、太平洋地域の遠隔教育について研究するという名目でホノルルのイーストウエスト・センターに客員研究員として滞在していた私は、元来大嫌いなオフィス・ワークから逃れるための格好の口実を得て、足しげくこのマカハ農園に通いはじめたのである。この報告は、そんな私とマカハ農園との関わりの中で得られた経験をもとにかかっている。

ところで、これまで私は少数民族運動や移民のコミュニティを研究するに当たって研究対象である運動や地域社会の中に具体的な役割をもって参加してし

*やまなか はやと、国立放送教育開発センター

まうやり方でフィールドワークを行なってきた。1981年から1年間ホノルルのポリネシア系移民たちがすむ低所得地区でおこなったフィールドワークでは、実際に地区のソーシャルワーカーとして福祉事務所に勤務しながら研究を行なった。今回の研究でも、マカハ農園運動の支持者として運動の一翼を担いながらフィールドワークを続けた。研究は始まったばかりで、まだ最終的な報告をまとめるにはやるべきことがたくさん残っている。

私の持論によれば、社会運動を研究する研究者には二種類あって、一つは社会変動論や社会体制論などのまじめな理論的関心にもとづいて研究に値する対象事例としての運動を探しだし客観的分析のまな板にのせるタイプと、もう一つは研究者としての立場も忘れて楽しそうで面白げな運動に手を染めてしまったあと対象の興味に引きずられる形でその運動を研究してしまうタイプである。あえていえば『集合行動論』のスメルサーなどは前者のタイプで、『ストリート・コーナー・ソサエティ』のホワイトなどは後者のタイプ。かくいう私も後者のタイプである。

このような私の研究スタイルは、運動指導者との議論・実践過程・運動の成果（企図された社会実験の結果）を重視し、インフォーマントからの聞き取り・観察・スタティックな調査が中心の伝統的な社会学のやり方とは異なるのみならず、方法論的に価値自由の立場をとるそれとは反対に、対象集団と価値を共有してしまうという点で本質的に異端であるという自覚をもっている。この私のやり方については、おそらく長短得失いろいろと議論の余地があろう。しかし、ここで方法論の議論をしてもらちがあかない。ただ、このフィールド・ノートがそのような下敷の上に書かれていることを知っておいていただきたいだけである。

2. 地区の特徴 一複合民族 コミュニティー

ワイアナエやナナクリなどオアフ島西海岸地域は、先住民のハワイ人たちが多く居住する経済的には貧しい地区である。オアフ島全体人口に占めるハワイ人人口は10パーセント程度であるのに対し、この地区では50パーセントに達している。

観光開発が極度に進んだオアフ島の中では例外的にこの地区には観光施設が少なく、いたるところに農地が残っている。オアフ島ではほぼ唯一の美しい自然の海岸と世界でも有数の規模を誇る珊瑚礁をもち、ハワイ州の海中公園に指定されているにもかかわらず、観光開発を免れてきた。ワイアナエ地区に観光開発の手が入らなかつたのには理由がある。

このわけを知るために、交通公社発行の「フリーダム・ハワイー自遊自在」という読者参加の観光ガイドブックに投稿されたつぎのような一文を紹介したい。これを読めば、そのわけは自然と理解できる。

「あの小錦ってA地区出身なんですよ。行ってみてフンフンとうなずけました、大抵の人がすごい体格。小錦よりもっと凄いボディの人だっているんですからノガイドブックでは西部方面、とくにA地区付近は治安が良くないので行くべきじゃないって書いてありましたが、皆さんも行ってみれば分かると思います。メイン・ストリートのBハイウェイ沿いの住宅街や商店はどこかうらぶれていて、本能的に降車中止。だけどビーチはすごくきれいなんですよ…。

今度はシェラトン・ホテルのあるCビーチへ移動したら、そこはホテル・ゲストもたくさんいてひと安心。ワイキキ・ビーチのようにきれいな白砂です。ここのライフ・ガードが言っていました、島西部でいちばん安心できるビーチがCビーチだそうです。A地区、Dベイ付近の住人たちは仲間意識が強く、ヨソ者には人見知り（違う言い方だけど警戒）しちゃそうです。それで何かとトラブルが発生するとか…。

遊ぶならCビーチ、それもホテルの人たちが来ている昼間だけにしておいた方が無難です。」（'87/H.K.）

日本人が行なう差別の形式はこれ以外にないのか、とでもいいくなるような見事な差別意識が観光客たちをこの地区に寄せ付けないのである。

ちなみに私は最初にマカハ農園を訪れるに当たって、この差別文書の英訳を携えていった。その英訳はさっそく運動のニューズレターに掲載され住民に配布され、住民たちの怒りを買った。その怒りがどのような形で組織化されるのか今私は注目している。

体が大きいというだけで危険視されるポリネシア系の住民たち。ワイキキのような華やかさが無いというだけで降車中止されてしまう質素な町並み。たしかに住民の平均所得は低いし、失業率も高い。行政のデータでも、この地区の労働可能人口のうちおよそ三人に一人は職を持たないとされる。オアフ島でもっとも開発の遅れた地域であり、道路も未整備なところが多く、周辺は米軍の演習場に囲まれ、オアフ島東海岸と比較して発展から取り残されてきた感は否めない。住宅事情も悪く、一軒の家屋に複数の家族が共住するといったこともめずらしくない。

ただ、この地区にはもうひとつの顔がある。ワイキキの観光産業にとって、

この地区に住む住民たちは最底辺のサービス労働を支える労働力の供給源でもあるのだ。早朝の街にたてば、多くの労働者がこの街から延々2時間もかけてワイキキへ通勤して行く交通ラッシュをみることができるはずだ。

したがって、観光資本は一方でこの地区の住民を観光サービス労働の最底辺労働力として搾取しながら、他方では、このような住民たちの存在を「リッチでトロピカル」なハワイのイメージを損なう余計者として差別し排除する仕組みを築き上げているのである。

しかし、オアフ西海岸地区は、観光開発によって自然の失われつつあるオアフ島の中であって、有数の自然が残っている。住人たちの多くは、土地投機による地価高騰によって都市部にすむのが難しくなってこの土地に居を構えた貧しい人々である。そこには、先住民族のハワイ人を始め、アジア系、ポリネシア系などの移民たちやその子孫たちが肩を寄せあってきた生活の場がある。多民族複合文化の島ハワイのひとつの典型的なコミュニティが成立し、この土地でうまれた多くの人々にとって、このワイアナエ地区はアイデンティティの一部となっている。

3. 農園の活動一目標、主体、参加者一

このマカハ農園の事業は、1979年にセイクレッド・ハート教会と州の助成を受けた民間の福祉相談機関であるワイアナエRAPセンターが、カトリック教会が所有していた2.5ヘクタールほどの土地を借り受けて開始した青少年育成プロジェクトに起源をもつ。当初の目的は、農場での実習をとおして青少年に適切な生活技能と自信をもたせようというものであった。この事業は、十分な教育機会と経済的な支えがなく、青少年犯罪、薬物依存、家庭崩壊などの社会問題をかかえるワイアナエ地区の青少年にとってそれなりの意義をもっていた。

この農場の主権者は、イタリア生まれのカトリック神父のジジ師。長年、フィリピンのスラムで民衆運動を続けてきた。1978年に当時のマルコス政権から国外追放処分をうけ、フィリピン移民の多いハワイに渡った。

ジジがこのプロジェクトに参加するようになったのは、1983年のことである。ジジがこの運動に加わり、また、この事業が地区に根をはるに従って、この地区の中で活動する他のいろいろな運動体とのつながりが強まっていくようになる。さらに、この農園で働く人々の多くに、フィリピン系移民や中南米難民などのマイノリティがみられることも手伝って、マカハ農園の運動は、与えられた福祉事業としての性格から急速に脱皮し、住民の主導権による自立的なセルフ・ヘルプの運動へと変化していった。

現在、農園で常勤で働くワーカーはジジを含めて6名だが、マカハ農園の運営を支える人々には、創設以来の教会関係者の他に、同地区で先住民の地域づくり運動をつづけるハワイ人の運動家、ワイアナエ海岸女性援助グループの活動家なども加わり、ハワイのマイノリティたちのゆるやかな連合体が形成されている。

マカハ農園が現在進めているプロジェクトにはつぎのようなものがある。

ハワイアン・ガーデンは、タロを筆頭にハワイ人の生活や文化と切り放せない土着の農作物や植物を栽培することでハワイの伝統文化の継承を計ろうというプロジェクトである。ハワイ人の伝統的な価値観では、ある種の花は、特別な意味もっている。たとえば、イリマなどの花は王室しかその着用を許されなかった。また、薬用、食用、宗教的使用などハワイ人の文化における植物の利用は他の民族のそれに負けないほど高度だ。

これらの植物を栽培し、また、レイなどに加工することで、自分たちの文化の再発見と一定の経済的収入を得ようというのがこのプロジェクトである。

農園の管理や製品の加工は、ワイアナエ海岸女性援助グループが行なっている。

オルタナティブ教育プログラムは、地区で問題を起こし少年審判に送られた青少年たちの社会復帰のためのプログラムである。農園で農作業に参加することが基本だが、日本のこの種の事業にみられがちな農本的な精神主義とは異なり収穫物を市場で実際に売りにいったり、技術者から灌漑システムの知識をならったりとプラグマティックな側面を重視するのが特徴だ。

家族援助プログラムは、住民によって運営される非営利事業として、危機に直面した家族に食料を提供したり、家庭内暴力の予防、家計の運営、家庭料理など各種の講座をひらいたりする。

家族農園プログラムは、地区内の家族がマカハ農園の中に小さな土地を借り、自ら耕して、野菜などを自給する活動だ。

平和教育プログラムは、地域の学校と手をつないで子供たちと「平和」について語り合うプログラムだ。「平和教育」といっても、日本人がその言葉からイメージする戦争の悲惨について語り合う教育とはやや異なる。ここでの緊急の問題は、どうすれば青少年を暴力や破壊的行動（バンダリズム）へ駆り立てずにできるかである。ここでは、「平和」は国家間の戦争という大テーマにとどまらず、家庭や地域社会の調和や協力、思いやりの問題としてもとりくまれている。この活動に関わっているのは、カトリックのシスターたちだ。

たべものと健康づくりプログラムは、小学生の子供たちに自分たちで野菜を栽培することをとおして栄養、調理、自然環境などの問題を総合的に学習させるプログラムで地域の小学校からクラス単位で参加を得ている。

農園の中に占める面積からみれば、最大のプログラムはデモンストレーション農園である。ここでは、コーン、ハーブ、大豆、各種野菜、果物、タピオカなどが栽培され、地域の老人や若い人々の協力によって商品作物として市場に出荷され農園の他のプログラムの財政の一端を支えている。

1983年にジジが着任して以降、新たに有機農業の考え方が積極的に導入されることになった。無農薬農法が採用され、ハーブの乾燥などに太陽熱の利用も試みられるようになっていく。

有機農業による「村起こし」運動で地域の自立を打ち立てようというのが、これら活動に共通するテーマとなっている。

4. タロのシンボル世界
この他にも、マカハ農園の周辺には、ユニークな活動を行なっているグループが集まっている。

— ハワイ人の土地観念 —
たとえば、ハワイ人の伝統漁法を復活させるかたわら漁業で生計をたてることを目的として活動をつづけるオベル・プロジェクト。軍事基地に囲まれた谷にタロ畑を開墾し、民家の復元や野外活動を通してハワイ人の青少年に伝統の生活技術を継承するカアラ・ファームのプロジェクト。ハワイ人の伝統に従ったタロづくりに関しては、このカアラ・ファームが最も積極的に取り組んでいる。また、ワイアナエの女性たちの暮らしや歴史について聴き書きをあつめオーラル・ヒストリーを編纂しようという活動など、その内容はきわめて多様で創造的だ。

これらの運動の中でジジの他に重要な役割を担っているリーダーがもう一人いる。ハワイ人のエリック・エノスである。エリックはカアラ・ファームの代表であり、彼が組織するワイアナエ土地問題協議会は、ワイアナエにすむ先住民たちによる自主的な村起こし運動として活動を続けてきた。ジジがこのワイアナエで運動を始めたきっかけとなったのはエリックとの出会いであり、ジジ自身もこのカアラ・ファームに数カ月住み込んだ経験がある。エリックたちの活動は伝統農法の回復からさらに伝統漁法の回復へと拡張され、かつて海と山にまたがったハワイ人の生活文化と精神世界の再構築をターゲットにおいた大きな展望をもつにいたっている。

彼との対話を通して、ハワイ人たちのタロに対する意識とハワイ人の精神世

界を描いてみたい。一人のハワイ人の活動家によって語られるタロとその世界はつぎのようなものだ。

ハワイ人の生活世界は、山地 (Mauka)、谷 (Awawa)、海岸 (Kai) とそれらをつなぐ流れ (Kahawai) の要素からできあがっている。山から海に注ぐ流れのほりにたつて周囲の谷とはるかに輝く海に囲まれた空間がハワイ人の宇宙である。古代のハワイ社会は一つの谷ごとにコミュニティを形成した。そして、海では漁を谷ではタロを栽培した。

水はハワイ語では、ワイ (Wai) とよばれる。ワイキキ (Waikiki=水が涌き出すところ) にもこの言葉が使われているだろう。水は豊かさを表すシンボルでもある。ハワイ語でワイワイ (Waiwai) と水を2回重ねれば「豊かな」という形容詞になる。かくのごとくハワイの伝統文化では水のもつ意味は重要であり、水があるということが、そのコミュニティの繁栄を意味したのである。

かつて白人がこの地にやってくる以前の伝統的なハワイ人の社会では、水を独占する、つまり、水利権を私有することは許されなかった。いっておくが、それはハワイの伝統社会が原始的な共産社会で私有観念が発達していなかったからというわけではない。ハワイの伝統社会はカフナ (Kahuna=長老) 制にみられるように高度な階級制度を発達させていた社会だったからだ。したがって、この事実はハワイ人の伝統社会がいかに水というものの公共性を特別に重視していたかを示している。水は単に物質としての水ではなく、ハワイ人の精神世界を統合する聖性をもつシンボルなのだ。

もうひとつ、水と同様にハワイの伝統文化において大切な概念がある。それは、アイナ ('Aina=土地) である。アイナは、アイ ('Ai) とナ (Na) の二つの言葉からできあがった言葉で、アイ ('Ai) は「食べ物」をさす。そして、ナ (Na) は「属している」という意味をもち、それが転じて「養ってくれるもの」とか「親」といった意味をもつこともある。つまり、アイナは、食べ物を養ってくれるものという意味をもち、ハワイ人たちは土地 (=アイナ) を自分たちの命の糧である食べ物を育て恵みを与えてくれる親のようなものとして考えてきたのだ。タロはこのワイとアイナの両方がないと育たない (著者注：ハワイのタロ栽培は水田形式である)。だから、タロは水と土地の聖性を等しく受け継ぐ神聖な食料なのである。

タロの主根はマクア (Makua) と呼ばれる。マクアとはハワイ語で人の「親」をも意味する。マクア・カネ (Makua-Kane) は男の親、つまり父を指し、マクア・ワヒネ (Makua-wahine) は女の親、つまり、母を指す。そして、

主根から出た小さなイモは、ケイキ (Keiki) と呼ばれるが、ケイキとは子供のことである。この主根から出ている状態の小さなイモは別にオハ ('Oha) とも呼ばれる。このオハから人間の家族をさすオハナ ('Ohana) という言葉が生まれた。つまり、タロの生態はハワイ人の家族社会を象徴するものであり、タロの成長は人の生殖と対応して理解されるのである。たとえば、タロの茎は、ハ (Ha) と呼ばれるが、これは呼吸を意味し、茎の先に広がる葉の中心はピコ (Piko) と呼ばれ、臍あるいは臍の緒を意味している。土地 (= アイナ) とタロは、このようにピコ (臍の緒) を介して生殖のメタファーの中で結合されるのだ。

しかし、白人のプランテーションがハワイにはいつてくるようになると、水と土地との独占が始まった。谷の水は水路によってプランテーションに導かれ、自然の流れは濁れてしまった。白人が入植して以来、水と土地を奪われたハワイ人は人口も減少し、コミュニティは衰退していった。

以来300年余、ハワイ人と白人プランターとの間には土地と水をめぐる闘いが脈々と続けられている。最近では、農業が競争力を失って斜陽産業になると、代わりに観光産業が大量に水と土地を独占するようになった。ゴルフ場の散水やリゾートのために水と土地が浪費されている。食べ物を育てるためではなく、遊ぶために土地が失われていっている。このような水と土地に対する不遜な扱



写真1 タロイモを水洗いする農園活動家エリック

いは、ハワイ人の文化や価値とは相いれないものだ。ハワイ人たちにとってタロを育てるために必要な水と土地を取り返すことは、したがって文化的な権利であると同時に、水と土地を本来のあり方にかえす仕事でもあると考える。

このカアラ・ファームのプロジェクトは、ハワイ人の伝統文化を再生させるための闘いの一つだ。ここでは、タロの水田をハワイの伝統の方法で開いている。水田は3枚で耕作面積は全体で1ヘクタールに満たないが、商業的な目的ではなく、むしろ、いくつもの種類のタロを植えることに努めている。水田に必要な水は、背後の山からパイプで引かれているが、この谷の下流部で計画中のリゾート（日本の観光資本が出資している）が建設されるとこの水が濁れる可能性もあり、この水田の存在自体が土地と水をめぐる政治的争点となりつつある。

タロ田のすぐ脇にはハワイ式の民家が復元され、ハワイ人の青少年たちはボランティアとしてファームの建設や運営に参加する過程で地元の年輩者（カプナ）から伝統文化について学習する機会を与えられる。その意味でこれらワイアナエでのタロづくりは、きわめて文化的教育的な意義を与えられているのである。

5. 今後の行方— これらワイアナエで活動をつづけるマイノリティたちの運動の共通の標語になっているハワイ語のスローガンがある。

ンティティ 「アロハ・アイナ、マラマ・カ・アイナ」

としての農業— アロハは「愛する」を意味し、「アイナ」は今述べたように「土地」を意味する。また、マラマは「いつくしむ」とか「育てる」を意味する。つまり、この合言葉は「土地を愛し、土地をいつくしもう」という意味を表している。この合言葉に示された精神は、他のハワイ人たちの運動にも共通してみとめられるものである。

土地に対する関心の高さは、ハワイに限らず、先住民族によるマイノリティ運動にみられる世界的な共通性であるといえるだろう。アメリカ・インディアンの運動、ニュージーランド（正しくはアオテアロア）のマオリ民族の運動、ブラジルのアマゾン熱帯雨林のインディオたちの運動、オーストラリアのアボリジニーの運動にも土地に対する宗教的な価値観に根ざした関心の高さがうかがえる。

現実には、ハワイ人たちの民族運動は、その目指すものの違いによっていくつかのグループに分かれている。もっとも先鋭的なグループには、数の上では

少数派ながら最終的な目標としてハワイの国家的独立を掲げているものもある。また、一方には、現在のアメリカの一州としての枠を堅持しつつ、その内部での地位の向上を目指すグループがいる。ただ、どのようなグループであるにせよ、その背後にある土地に対する愛着の精神にはきわめて強い共通性が認められる。そして、その精神を新たな民族の統合のアイデンティティとして、ハワイ人たちの文化復興が叫ばれ、社会的な平等へのたたかいが進められている現実には注目すべきだ。

このような土地に対する価値観の上に成立する伝統農業は、これら先住民族運動の有力な手段となるとともに、対抗的な生活文化の価値を満たすライフスタイルの一部となるだろう。ひるがえって、このような農業の存在形態をどう評価するかがわれわれにつきつけられた課題だろう。経済性と生産性の観点にたつてこのような農業の存在を伝統に対するセンチメンタリズムとアナクロニズムと決めつける立場はもはや説得的ではない。ただ、一方、このような農業のあり方を農産物という物的価値ではなく民族的な精神的価値（アイデンティティ）を産出する脱工業化社会段階の一種の情報産業であるといううがった見方に突き進んでよいものかどうか、それもまた疑問が多い。そんなわけで、とりあえずは、今少しじっくりとこの運動とつきあってみたいと考えているところである。